

写経作法

- 一、お写経の前には合掌し「写経觀念文」をお読み下さい。
- 一、書き上げましたお写経は、正面の仏様の前に、お供え下さい。
- 一、机上の写経用具など一式は、そのまま机の上にお据置き下さい。
- 一、台紙手本等の印刷物を、ご希望の方は受付にお申し出くだされば、お渡し致します。
- 一、お写経を終えて道場をお出になれます時は首におかけの輪袈裟を受付の係の者にお返し下さい。

合掌

写経觀念文

水は是れ大悲慈潤の智水、墨はまた楞嚴禪定の石墨なり。定の墨、慧の水和合して、実相法身の文字を書写す。この文字は三世諸仏甚深の秘蔵、三身如来真実の正体にして、禪定智慧の法門、自行化他の功德悉く皆具足す。是れを以て此経の文字は十界に色身を現じ、随類説法して利生したもう。

この故に我れ今この経を書写し奉る。願わくばこの功德の善根に依つて、弟子法界の衆生とともに、無始已來の三業六根一切の罪障を皆悉く消滅し、正念に空を觀じて仏を見奉り、法を聞いて無生忍を証せんことを。

【注解】

楞嚴禪定——悟りのこと、安心の境地をいう。

実相法身——真如法界の理と一致せる仏の姿、永遠なる仏の本体をいう。つまり、写経の文字は一字一字文字みなこれ仏のありのままの姿であるということ。

三世諸仏——過去・現在・未来を三世という。この三世に出現し給う多くの仏のこと。

三身——仏を法身・報身・応身の三つに分類して、これを三身という。法身とは、永劫不變、無色無形の本体（理仏）に名づけて言い、報身とは、修行によつて報い顯われる仏身で、阿弥

陀仏の如きものをいう。すなわち、困難な菩薩の修行に堪えて、精進努力の結果、顯われ

写経観念文

水は是れ大悲慈潤の智水、墨はまた楞嚴禪定の石墨なり。定の墨、慧の水和合して、実相法身の文字を書写す。この文字は三世諸仏甚深の秘蔵、三身如来真実の正体にして、禪定智慧の法門、自行化他の功德悉く皆具足す。是れを以て此経の文字は十界に色身を現じ、随類説法して利生したもう。

この故に我れ今この経を書写し奉る。願わくばこの功德の善根に依つて、弟子法界の衆生とともに、無始已来の三業六根一切の罪障を皆悉く消滅し、正念に空を觀じて仏を見奉り、法を聞いて無生忍を証せんことを。

【注解】

楞嚴禪定——悟りのこと、安心の境地をいう。

実相法身——真如法界の理と一致せる仏の姿、永遠なる仏の本体をいう。つまり、写経の文字は一文字一文字みなこれ仏のありのままの姿であるということ。

三世諸仏——過去・現在・未来を三世という。この三世に出現し給う多くの仏のこと。

三身——仏を法身・報身・応身の三つに分類して、これを三身という。法身とは、永劫不變、無色の無形の本体（理仏）に名づけて言い、報身とは、修行によつて報い顯われる仏身で、阿彌陀仏の如きものをいう。すなわち、困難な菩薩の修行に堪えて、精進努力の結果、顯われた有形の仏である。応身とは、報身仏を見ることができない者を救うために顯われた仏であつて、つまり仏への橋渡しをして下さる釈迦牟尼仏の如きをいう。だから、これは歴史的存在を認め得る仏である。

如来——仏と同じ道を歩んで、同一理想境に到達した人の意。

自行化他——自分がまず修行し、またその法をもつて他人を教え導くこと。

十界——迷いの世界を六つに分けて、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上とし、悟りの世界を四つに分けて、声聞・縁覺・菩薩・仏とし、合わせて十界という。

三業六根——三業とは動作・言語・意志の三つ、すなわち身・口・意の諸精神作用をいう。六根とは感覺の働きである眼・耳・鼻・舌・身・意の六官をいう。

無生忍——修行の力によつて悟りを開くこと。

摩訶般若波羅蜜多心經の韻文意識

觀自在菩薩

觀自在なる 觀音菩薩

行深般若波

妙なる般若の 空智のためにと

羅蜜多時

御修行なされ たまいしに

照見五蘊皆

この身の 五つの要素

空

すべて空ぞと 知りたまい

度一切苦厄

悟りの岸に 至り得て

舍利子

苦しみ厄い 渡られし

色不異空

舍利子よ

空不異色

この世にあるものは すべて空

色即是空

にほかならず

空即是色

空もこの世にあるものの あら

受想行識亦

ゆる相に異ならず

復如是

この身そのまま 空にして

舍利子

空もそのまま この身に

是諸法空相

感じ思う ことごと

不生不滅

やろうと思う その意志も

不垢不淨

ももの知り知識の 考えも

增上不減

すべて空に ほかならず

是故空中

舍利子よ この世にあるものは

行識

解けて結びて 変わりつつ

無色無受想

空の相に 変わりなく

身意

生まれもせねば 滅びもせず

無眼耳鼻舌

垢れもせねば 淨みもせず

觸法

増しも 減りもせぬものぞ

無眼界乃至

この故 空の相にて

無意識界

つらつら我身を 見つむれば

無無明

この身なければ 感じることも

乃至無老死

想うことも 意志もなく

亦無老死尽

眼も 耳も 鼻舌も

無苦集滅道

この身意 ともどもに

亦無無明尽

すべて一時の 相にて

乃至無老死

形も 声も 香も 味も

亦無老死尽

感觸 觀念 みなともに

無苦集滅道

因と縁とに 支えらる

亦無無明尽

一時の因果 仮りのもの

乃至無老死

かかる智慧にて みつむれば

亦無老死尽

永遠に変わらぬ ものはなく

無苦集滅道

見える世界は もとのこと

亦無無明尽

思念の世界も ありえなく

乃至無老死

迷いの元の無明なく

亦無老死尽

無明の尽くる こともなく

無苦集滅道

はてはこの身に 老いもなく

亦無無明尽

死として恐るる ものもなく

乃至無老死

老死の尽くべき 故もなく

亦無老死尽

苦も 苦しみの原因も

無智

固く変わらぬ 智慧もなく

亦無得

亦何一つとて 心には

以無所得故

得たりと思える ものみなし

無智

いかなるものにも こだわらず

亦無得

我が身のものぞと とらわれぬ

以無所得故

ひろさ心を持つが故

無智

かくなる智慧に 目を開き

亦無得

こよなく悟り 求めつつ

以無所得故

人を助けつ 菩薩たち

無智

有りと思える 迷いなく

亦無得

無しとかなしむ 悲観なく

以無所得故

かかる般若の 智慧故に

無智

心に こだわるものもなく

亦無得

心に こだわりなき故に

以無所得故

恐るるものとて なにもなく

無智

すべて一切 さかしまな

亦無得

考えなどや うわついた

以無所得故

思いを遠く 離れ来て

無智

いかなるものにも とらわれぬ

亦無得

涅槃こそを 得たまえる

以無所得故

三世にいます 御仏も

無智

かかる般若の 智慧により

亦無得

阿耨多羅三藐三菩提なる こだ

以無所得故

わりなき

無智

悟りこそを 得たまえり

亦無得

この故 知るべし 般若波羅蜜

以無所得故

多

無智

これぞ大なる 神の真言で

亦無得

これ大いなる 悟りの真言で

以無所得故

これこの上なく すばらしき

無智

真言で

亦無得

これに比ぶるものなき 真言

以無所得故

であつて

無智

よく一切の 苦悩を除き

亦無得

真実にして 微塵の偽りもなし

以無所得故

故に 般若波羅蜜多の真言を

無智

説こう 即ちその真言は

亦無得

かくのごとくに 説いて言う

以無所得故

掲諦

無智

掲諦

亦無得

波羅揭諦

以無所得故

波羅僧揭諦

無智

波羅揭諦

亦無得

波羅僧揭諦

以無所得故

般若心經

般若心經

般若心經

般若心經

般若心經

觀自在菩薩

行深般若波

羅蜜多時

照見五蘊皆

空

度一切苦厄

舍利子

色不異空

空不異色

色即是空

空即是色

受想行識亦

復如是

舍利子

是諸法空相

不生不滅

不垢不淨

不增不減

是故空中

無色無受想

行識

無眼耳鼻舌

身意

無色声香味

觸法

無眼界乃至

無意識界

無無明

亦無無明尽

乃至無老死

亦無老死尽

無苦集滅道

觀自在なる 觀音菩薩

妙なる般若の 空智のためにと

御修行なされ たまいしに

この身心の 五つの要素

すべて空ぞと 知りたまい

悟りの岸に 至り得て

苦しみ厄い 渡られし

舍利子よ

この世にあるものは すべて空

にほかならず

空もこの世にあるものの あら

ゆる相に異ならず

この身そのまま 空にして

空もそのまま この身にて

感じ思う ことごと

やろうと思ふ その意志も

もの知り知識の 考えも

すべて空に ほかならず

舍利子よ この世にあるものは

解けて結びて 変わりつつ

空の相に 変わりなく

生まれもせねば 滅びもせず

垢れもせねば 淨みもせず

増しも 減りもせぬものぞ

この故 空の相にて

つらつら我身を 見つむれば

この身なければ 感じることも

想うことも 意志もなく

もの知り知識も なきもので

眼も 耳も 鼻舌も

この身意 ともどもに

すべて一時の 相にて

形も 声も 香も 味も

感觸 觀念 みなともに

因と縁とに 支えらる

一時の因果 仮りのもの

かかる智慧にて みつむれば

永遠に変わらぬ ものはなく

見える世界は もとのこと

思念の世界も ありえなく

迷いの元の無明なく

無明の尽くる こともなく

はてはこの身に 老いもなく

死とて恐るる ものもなく

老死の尽くべき 故もなく

苦も 苦しみの原因も

永遠に続く 由もなく

苦しみ尽きる こともなく

無智

亦無得

以無所得故

菩提薩埵依

般若波羅蜜

多故

心無罣礙

無罣礙故

無有恐怖

遠離一切顛

倒夢想

究竟涅槃

三世諸佛

依般若波羅

蜜多故

得阿耨多羅

三藐三菩提

故知般若波

羅蜜多

是大神呪

是大明呪

是無上呪

是無等等呪

能除一切苦

真實不虛

故說般若波

羅蜜多呪即

說呪曰

揭諦

揭諦

波羅揭諦

波羅僧揭諦

菩提薩婆訶

般若心經

固く変わらぬ 智慧もなく

亦何一つとて 心には

得たりと思える ものみなし

いかなるものにも こだわらず

我が身のものとぞ とらわれぬ

ひろさ心を 持つが故

かくなる智慧に 目を開き

こよなく悟り 求めつつ

人を助けつ 菩薩たち

有りと思える 迷いなく

無しとかなしむ 悲観なく

かかる般若の 智慧故に

心に こだわるものもなく

心に こだわりなき故に

恐るるものとて なにもなく

すべて一切 さかしまな

考えなどや うわついた

思いを遠く 離れ来て

いかなるものにも とらわれぬ

涅槃こそを 得たまえる

三世にいます 御仏も

かかる般若の 智慧により

阿耨多羅三藐三菩提なる こだ

わりなき

悟りこそを 得たまえり

この故 知るべし 般若波羅蜜

多

これぞ大なる 神の真言で

これ大いなる 悟りの真言で

これこの上なく すばらしき

真言で

これに比ぶるものなき 真言

であつて

よく一切の 苦悩を除き

真實にして 微塵の偽りもなし

故に 般若波羅蜜の真言を

説こう 即ちその真言は

かくのごとくに 説いて言う

揭諦

揭諦

波羅揭諦

波羅僧揭諦

菩提薩婆訶

般若心經

空不異色

空もこの世にあるものあら

色即是空

この身そのまま空にして

空即是色

空もそのままこの身にて

受想行識亦

感じ思うことごとく

復如是

やろうと思うその意志も

舍利子

舍利子よこの世にあるものは

是諸法空相

解けて結びて変わりつつ

不生不滅

空の相に変わりなく

不垢不淨

生まれもせねば滅びもせず

不增不減

増しも減りもせぬものぞ

是故空中

この故空の相にて

無色無受想

この身なければ感じることも

行識

想うことも意志もなく

無眼耳鼻舌

眼も耳も鼻舌も

身意

この身意ともどもに

無色声香味

形も声も香も味も

觸法

感觸觀念みなともに

因と縁とに

支えらる

一時の因果

仮りのもの

無眼界乃至

かかる智慧にてみつむれば

無意識界

永遠に変わらぬものはなく

見える世界は

もとのこと

思念の世界も

ありえなく

迷いの元の無明なく

無明の尽くることもなく

はてはこの身に

老いもなく

死とて恐るる

ものもなく

老死の尽くべき

故もなく

苦も

苦しみの原因も

永遠に続く

由もなく

苦しみ尽きる

こともなく

苦しみ尽くす

道もなく

心無罣礙

有りと思える迷いなく

無罣礙故

無しとかなしむ悲観なく

無有恐怖

かかる般若の智慧故に

遠離一切顛

心にこだわるものもなく

倒夢想

心にこだわりなき故に

究竟涅槃

恐るるものとしてなにもなく

三世諸佛

すべて一切さかしまな

依般若波羅

考えなどやうわついた

蜜多故

思いを遠く離れ来て

得阿耨多羅

いかなるものにもとらわれぬ

三藐三菩提

涅槃こそを得たまえる

阿耨多羅三藐三菩提

三藐三菩提なるこだ

故知般若波

阿耨多羅三藐三菩提なるこだ

羅蜜多

わりなき

是大神呪

悟りこそを得たまえり

是大明呪

この故知るべし般若波羅蜜

是無上呪

これぞ大なる神の真言で

能除一切苦

これ大いなる悟りの真言で

真実不虛

これこの上なくすばらしき

故說般若波

真言で

羅蜜多呪即

これに比ぶるものなき真言

說呪曰

であつて

揭諦

よく一切の苦悩を除き

揭諦

真実にして微塵の偽りもなし

波羅揭諦

故に般若波羅蜜多の真言を

波羅僧揭諦

說こう即ちその真言は

菩提薩婆呵

かくのごとくに説いて言う

般若心經

揭諦

波羅揭諦

揭諦

波羅僧揭諦

波羅僧揭諦

菩提薩婆呵

般若心經

青場透行拙訳

声を出して読む場合——二音節ずつを区切って読み、「の」とか「に」のように一音節で切れる場合は、その一音節を

二音節分引きのばして読みます。

例えば 観自在なる観音菩薩妙なる般若の空智のためにと御修行なされたまいしに
という風に右側の棒線の一本ずつで声を区切って読み上げていただければ、ほぼけっこうかと存じます。